

COSMOS集



「あすなる集」特選

糸へんの文字

工藤 亜希子*東京

洲浜取草花模様淀君のものと伝わる小袖の端切れ

スカジャンの原型ならむ国芳の武者絵の刺繍 火消し半纏

糸へんの文字の妖しさ綾・織・紗・襦子・綸子・緞子・繚乱・絢爛

うつむいた心が少し顔上げて藤井棋聖の誕生を見る

何か火にくべゆくような心地して母のこと父のこと過去のことと思う

コロナ渦

手嶋 千 尋*福岡

黒ひげの男がふえた梅雨の入り いや、黒マスクの男がふえた

《三水》が《示偏》よりらしくなる《コロナ渦》とは目に見えぬ渦

楽しみもやや憂うつな集まりも全て消滅コロナはつづく

六月のカレンダーやぶり歯ごたえなし今年の七月山笠がない

《無観客試合》にひびく 放課後に聞こえた球音、あおいかけ声

百年の檜

古木 増美 岐阜

檜の木の上半分を切り落とす約定交はず隣家の人と

檜の木と語る柚工（よす）の半纏に《郡上愛林》と染めぬきてある

我らより長くこの家を守る檜唯々諾々と刈り込まれゆく

柚人は仙人のごと百年の檜の枝葉を空に飛ばせり

どんぐりこ拾ひし子らの思ひ出も檜は引き取り黙つて切らる

外骨格

栗山 貴臣*福岡

全身が外骨格のマンシヨンの中からじわり光漏れ出す

猫柄のカップでコーヒー飲みながらケーキを食べる日曜の朝

歩くたび稲の間に垣間見る畦まで続く長き青空

これまでは栗さんと呼ぶ仲良しが気づけば今は栗山さんに

夕闇の扉を開けて顔を出すそんな仕事でホタルあらわる

なにができよんな

石塚 恵子 香川

百均の彫刻刀と消しゴムで作った落款わが歌に捺す

ハクビシン、タヌキ、イノシシ、トマコの禍女の手もて柵造らんか

玄能で鉄杭打てば男衆（おとこ）が寄り来て不安げ「なにができよんな」

スチール製メツシユフェンスを巡らすに800本の結束バンド

授粉などがせぬままに小玉スイカ五つが育つ beginner's luck?

クルナウイルス

大越 巖 福岡

熊がでて猪も出るやまざとに狐の親子をこの前見たとふ

織姫は手縫ひのマスク携へて年に一度の逢瀬たのしむ

笹飾る短冊読めばつまされる幼稚園児の「ころななくなれ」

たはむれに一文字かへて憂さ晴らしクルナウイルス・新型クルナ

三密を避ける明け暮れおしなべて親密の情の淡くもなるかな

子供 の 母 川 端 富起子*宮 城

過去行きの蒸気機関車に乗る母が子供に戻りまた話し出す
五年生の時の話をする母と一緒にわれも遊びいる午後
八十年前の記憶を聞きながら子供の母を受け止めきれず
「ベガルタ」の年間チケット二人分延期決まりて紙切れとなる
マンシヨンの七夕飾り見上げつつ中止の仙台七夕おもう

野 良 中 島 涼 高 知

外出の自肅に覚えし野菜づくりまづふかふかの土づくりせり
入道雲湧きゐる峡の空見つつ西瓜六株植ゑ終はりたり
「お先に」と声かけ野良を終ふる夕べ集落おほふ栗の花かな
通り雨に祖母と畑の雨やどり里芋の葉の大きかりしよ
カラスよけのネットの隙間をすいすいとつばめ往き交ふわが軒の巢に

向日葵の咲く 一ノ宮 陽 子 鳥 取

目には蚊を耳には蟬を齒には虫を飼つてゐるなり梅雨空の下
梅雨に入りなほ食欲の落ちし夫さうめん十本ほどの生なり
君はもう狼男にはなれず満月の夜をうたた寝しをり
この家に忍び込んだといふやうに鴉のこせり真黒なる羽
わたしにも青春時代のあつたこと中二は知らず 向日葵の咲く

花 の 重 さ 水 辺 あ お 静 岡

あかつきの蟬鳴く前のしづけさに目を閉ちてをり樺大樹は
はじめての凌霄花ひとつ咲き花の重さを測る夏風
帛ひの雨に大粒小粒ありかうもり傘にあたりては撥ね

水無月の三日続きの豪雨去り工事現場の音に陽が撥ぬ
家人さへありかを知らぬメーターを知る人がゐる庭を通りぬ

テゲテゲ生きる 村 田 淳 子*琦 玉

マジヤンもダンスホールも知らぬままテゲテゲ生きて七十まぢか
キリストは馬小屋のなか生まれたりウイルスだつてごまんといたさ
一曲だけ唄えるようになりたくてちあきなおみの「紅い花」聴くも
電子化は肌の温もり伝わらず甲殻類の人間増える
この頃は(メダカのバアバ)と呼ばれお卵えんとり精出す姿みられて

コロナ時代 中 村 京 兵 庫

コロナ禍でビザの olmayan 娘家族 まだふみも見ずロスアンジェル
スからやかに熊避け小鈴鳴らし行くふた月おくれの新生活が
自販機に冷えたマスクを売るといふコロナ時代の産物のひとつ
部屋内をへりコプターが飛ぶやうな羽音に放つ殺虫剤ジェット
雨音にかこつけポリウム上げて観るイケメン二人の恋の鞘当て

姫 小 判 草 高 山 幸 子*三 重

三月みつきぶり学校のチャイム聞こえる畑の草とり三限目まで
ひまわりの種をついばむ栗鼠と鶯しらびそ小屋の出窓にならび
目の端をメタリックブルーかすめたり真夏日まかのした石竜子しなやか
しやらしやらと今日の苛立ち振りはらう姫小判草を手に揺らしつつ
うす紅に合歓の糸花咲き出でて夫は今年も大豆播きゆく

ハクビシン 東 坂 小 夜 子 神 奈 川

黒猫は「文句あるか」と睨みつけ「ふん」と向き変へすまして行けり

マスクしてあひさつ交はず思ひきり笑顔つくれどさつと見えな
ごみ捨てに行けばうわつハクビシン「シッシッ」と言へば困り顔する
前をゆくバスは鋭角に左折せり大きな体くねらせながら
次々と水が流れてくるやうだ川のきらめきパツハの曲は

理科少年 永松 たづ子*大分

雨間の雲間より差す陽の脚が夏萩にとまりひと枝の照る
ガラス板にローソクの煤つくる夫、理科少年は日食を待つ
九州に線状降水帯三つその各々の下にな友おり

轟音が生活の音を消したりと豪雨の日田より友はメールす
郊外に広がる水張田高速のまたぎて水面にトラック走る

昭和の匂い 篠田 清 子*広島

ざあざあと屋根たたく雨ドドツと壊れた樋をぬけ流れ出す
大雨と風にあおられバナナの葉練り返しつツバタバタ揺らす
傘さして草むらの道長靴で踏めば昭和の匂い漂う

災害の町を写せば声のする「こりゃあどげんもこげんもならん」と
最下位のカーブの選手それぞれを賞めるOB達川光男

鈴 虫 榎本 久美子 山形

梅雨明けを待たず同居の鈴虫が慣れぬ仏間にかぼそく鳴けり
庭に蟬かごに鈴虫はべらせて虫好きの夫至福に酔へり
スプレーにリングもいがお薦めのハッカのアロマ虫除けに買ふ
朝採りのナスとキウリは真つ先に十一匹の鈴虫が食む

物分りよすぎる人にはなれません言ひたき言葉はずにをれぬ
「ウイルスは通過します」と言はれても夏空色の布マスク欲し

虫偏の文字 関 康子 大阪

生くるため生き来しわれの歲月かあれ蛞蝓の道程ひかる
読み悩む虫偏の文字いと多し蛞蝓・蚯蚓・蠅・蠅・蠅
幾許の思考重ねてさりげなし十八歳の駒の一指し

日蝕と夏至と父の日重ぬるとふ父無き今年は光が足りぬ
首の座らぬみどりご揺らす若き二人動画に届く動画に叱る

雨強き日 磯部 剛*新潟

草引きて黒くなりたるわが爪の伸びる早さに時が消えゆく
滝うらの空洞のごと静もりぬ雨強き日の妻を待つ車中
わかば町の納涼会を中止すと回覧板来ぬ梅雨明け前に
ぼこぼこことペットボトルの水をかけ墓石洗う自動車道わき
はつ夏の溪流に浸す足の先ひかりの底を岩魚が走る

二等兵の父 水野 須美子*宮城

乳飲み児を花束抱くように抱き梅雨晴れの中青年が行く
路地裏の古書店に入る昼下り犇めく本の声するような

耳遠くなりにしわれの困りごと「ソーシャルディスタンス」声の届かず
白旗を掲げし子らの映像を忘れてならじ沖繩の日は
二等兵でありにし父の戦場の多くは語らず昭和に生きし

とんかつ弁当 石沢 いくよ 静岡

犬二匹派手な洋服着せられて梅雨の晴間の信号を待つ
この夏はミニスカートでと医師笑ふ静脈瘤の手術を終へて
老いたれど美人は美人ブスはブス大きいマスクで半分隠す

買物の嫌ひな夫が買つて来るテイクアウトのどんかつ弁当
亡き後はいい事ばかり思ひ出し語り合ひたい残りし者は

藍の器 橋本武則*大阪

ボトル手にシエフの画像の髭濃くて巴里シャンゼリゼ宴ざわめく
筈を食むははつなつ愉快なり若布に磯の香りめでつつ

一日の為し得しことを肯ないて紅甘き西瓜頬張る

夜の昏き明かりに臥する妻の身の輪郭やさししげき寢息
雨脚に打たれて戦ぐあじさいは藍の器となりて雫す

街川 岩崎たけ子 福岡

街川のゆるき流れに映りをり梅雨明けしたる濃ゆき夕映



「その二集」特選

「おはよう」の声 高橋 梨穂子*新潟

じ……じわ……と梅シロップの氷砂糖溶ける過程をつい見てしま

一睡もできず部屋にはラジオから誰かが告げる「おはよう」の声
性別欄うっかり忘れたふりをしてわざと書かずに出すアンケート

横田滋さんの訃報にペン先はつむぎる言葉をなくしてしま
薄っぺらい紙でしかないこの紙にどんな言葉を書き殴っても

おだやかな街川に沿へば夕焼雲しづかにしづかに花のごと浮く
雨の降るたびに勢ひ紫陽花は色を深めて庭に絵を描く
庭先に穴を残しし蟬ならむ七月梅雨明け早朝を鳴く
茄子の葉の上に螻蛄しばらくを陽に三角の顔みがきをり

シャインマスカット 塚本裕紀子 東京

子の家の留守居頼まれ出掛けたり電車に乗るのは三ヶ月ぶり
生命感見えぬ車内に腰浮かせ息詰め座る傀儡のごとく
後ろから象のごとくに迫り来る大きな車を避ける路地裏

籠りある夫婦二人に届きたる岡山のシャインマスカット「晴王」
「晴王」の甘き香りが薄絹のごとく漂ふ夜の灯の下

ランタナの黄の花ほろほろ零れ落ち呆気ないほど暗き梅雨空

名なき山 中村 恵*鳥取

わが家まで百メートルの日本海百メートルの名なき山たち

うちの谷ととなりの谷のあいだには(鼻)あり(鼻)に灯台のあり
最寄り駅からは田んか山なかに舗装されてる道があります

駅までを歩かんとしてスニーカー履けば家族が眉を曇らす
ガムテープで捕らえた鼠を風呂に漬けしまつする術教えた義祖母

「春の新色」

高橋 みどり*愛知

コロナ禍をしのぎ迎えた夏の夜の老人ホームを豪雨が襲う
ひとたびも塗ることのなく夏は来ぬ リップスティック「春の新色」
カーナビの履歴の中に再会す父を看取った病院の名に

メルケルもオバマ、トルドー、マクロンも迎えし英虞の海しずかなり
執念しと君は言いたり 色褪せてこうべを垂れる夏のあじさい

虹の立つ朝

内藤 丈子 福井

うす紅の野ばらを揺らす風立ちてわが胸の扉をしづかに開く
四十雀ひなのさへづり聞く朝は巢箱の中に夏が来てゐる

梅雨雲をランキュラスの花びらの中にしまひて憩ふ日曜
みどり葉のあはひに紅き頬のごと二十日大根みのる梅雨明け
にんじんの白き花咲く初夏の風にのりくる父のたましひ
真白なる柚子の花びら濡らしゆき梅雨は去りたり虹の立つ朝

翡翠を探す

福 島 健太郎 神奈川

パンデミックなれども世界の行末を軌道修正する好機とぞ
頼まれし覚えはあれど買物をストンと忘れ暮れ泥む町
若き日の恋に悩みし時の過ぐ海原を背に翡翠を探す

覚悟するほどの事ではないと知る木槿の花に雨のそほ降る
ひねもすを雲をながめて暮らしをり哲学などをするにあらねど
生きたこと問ふATMが背後より「オ忘れモノハアリマセンカ」と

ブラッドオレンジ

成 田 裕 子*青森

一日の悔恨と夢溶かしたるブラッドオレンジの夕日滴る

今日も雨煙る高架橋あの日見た君の横顔グレイの瞳

千年も変わらぬ夕陽の色に咲く薔薇の名前は「万葉」という

コスモスを種より植えて子のように日々の成長見守りており
二十余のコスモスそれぞれ何色に咲くのだろうか七月の風

地図の空白

今 井 智 美 福岡

生きるとは食ふことなり家計簿はへはらへこあおむしの表紙と決める
拘置所の近くに住みて二十年意識の地図に空白を置き

拘置所の夜の窓あはく灯るとき見えぬ人らの気配立ち初む
山桃がほろんほろんと実を落とす風なき午後をだれと語らん
あぜ道の焚火が空に紛れゆく思い出せない言葉のやうに

鶯色の種

荒 川 ゆみ子 東京

みづからを「おかあさん」と言ひし日のガーゼのやうな六月の雲
給食の牛乳パックの量み方まづは覚えし帰国児の子は
どうしても譲れぬことあり枇杷の実の中にぐりりと鶯色の種
知事選のポスターに雨の降りかかり大汗かいてゐるやうに見ゆ
再選の速報流れ口角を上げてでも下げてでもマスクが隠す

絶滅危惧種

増 田 柳 子*福岡

水田で絶滅危惧種に会い得たり嘴長きクロツラヘラサギ
後輩が辞めた寂しさ吹き飛んだ一羽のクロツラヘラサギを見て
このままじゃ絶滅危惧もむべならん長いしゃもじの嘴重い
正規、無期、有期、派遣の複雑な集合体にのり込む毎日
使用簿に名前の記入を頼んだら「名前はない」と派遣さん笑う

母の半袖 石田信夫*鳥取

手のひらにおさまるほどに畳みゆく母の半袖ちさくなりたり
四十年物の木製ピーラーで茄子の皮削ぐかんのごとく
鳥取の夏のことぶれスーパールのシマメイカの背の濡れる唐金
ちさちゅちゅき一羽の雀が歩を合わせ朝の散歩に付きあいくれぬ
朝ドラの再放送を見る母が同じ場面で声あげ笑う

きうりの孤独 永田恵美福岡

きうりにはきうりの孤独大根には大根の孤独厨房の夕
コンビニのレジ横の棚のコロッケが学校帰りの子供を待つてる
幼な子が大人の隙間駆けまはるソーシャルダンスの夏越の祓
テレビだのラジオだので誤魔化せど一人の夕べは一人の夕べ
ふるさとに会ひたい人と会へぬ人会ひたくない人をりて盃蘭盆

火の花 奥呂美生東京

むぎわらを深くかむりて長谷の寺梅雨の谷間のあぢさゐの花
誰も居ぬ古き木箱に入所料入れて一礼あぢさゐ巡る



けぶるよな六月の夜におごそかな火の花上がり終息念す
大分の宇佐の花火師に倣ひたるコロナウिल्ス終息の意気
その昔吉宗の世に「悪疫よ鎮め」と願ひし隅田の花火

故郷の雨 引間三郎*埼玉

手の甲にとまりし蝶の触覚は皮膚をなぞりてこそばゆきかな
雨止みて水玉残る花びらのいきいきとして青き紫陽花
木漏れ日のまばらに続く山道に我が足元の心ほそさよ
ひと時の梅雨の晴れ間に安堵する予想を越える故郷の雨
払いても翌朝見れば糸を張りクモは澄まして居座りていぬ

手のひら 丸山克介鹿見島

女四人紙コップ捧げ乾杯す休業要請解けたる店に
日に幾度も手洗ひすれば手のひらのひらのあたりが白く透けたり
梅雨晴を逃さぬごとくサーファーら海の光を揺らして競ふ
期末試験間近なるらし露天湯に円周率を言ひ合ふ二人
寄りて来る雀に餌を与へたり爪先ほどの煎餅のかげら

生きてみよ 三上恵美子香川

湿原の水の溜りのやうに浮き朝の右手を這ふ静脈瘤
喪の家の久しく開かぬ小窓にも七月一日風吹き過ぐる
殖ゆることのみに意図あるウिल्スの宿主が死ねばおのれも死ぬる
父の享年十年を過ぎ母までに四年ありその四年生きたし
今一度生きてみよとぞ言ひやりて折れしサルビアの枝土に挿す